

### カンキツ「熊本EC12」の露地栽培における適正葉果比は100である

露地栽培「熊本EC12」は葉果比100で2L果の個数割合が高く、12月中旬の果実品質は糖度13度程度、クエン酸濃度1%以下となる。また、翌年の着花は多く、葉花比は低い。なお、葉果比100の樹冠容積1m<sup>3</sup>当たり着果数は15果程度である。

農業研究センター果樹研究所常緑果樹研究室(担当者:佐々木 雲海)

#### 研究のねらい

「熊本EC12」は12月に成熟し、年内に出荷可能な本県のオリジナル品種である。品種登録以降、産地では植栽面積が増えつつあるものの、栽培技術が確立していない。そこで、高品質果実を安定的に生産するために着果程度の違いによる果実階級割合と翌年の着花程度を明らかにし、栽培の指標とする。

#### 研究の成果

1. 果実階級は葉果比100および葉果比120では2L果中心の果実が生産できる。葉果比80ではL果中心の果実となりM果以下の割合も高い(図1)。
2. 葉果比が高いほど果実は大きくなり、糖度は低くなる。クエン酸濃度はいずれの葉果比も1%以下となる(表1)。
3. 1樹当たりの収量は、処理区により大きな差はない。また、樹冠容積1m<sup>3</sup>当たり着果数は、葉果比80では17果程度、葉果比100では15果程度、葉果比120では14果程度である(表1)。
4. 翌年の着花数はいずれの区も多く、葉花比は前年の葉果比が高いほど低くなる(表2)。

#### 成果の活用面・留意点

1. 果樹研究所における高接ぎ5~7年目の結果である。試験では新葉率50%程度で程良く新梢が発生している樹を用いた。
2. 7月中旬に摘果果実の7割を粗摘果し、8月中旬に残りの3割を仕上げ摘果した結果である。
3. 「熊本EC12」は着花性が高く、着花過多になると樹勢低下が懸念されるため、着花抑制処理を行い適切な樹勢を維持する必要がある。
4. 「熊本EC12」はカンキツ栽培地域で栽培が可能であり、温暖で日照時間が良く排水良好な園に適する

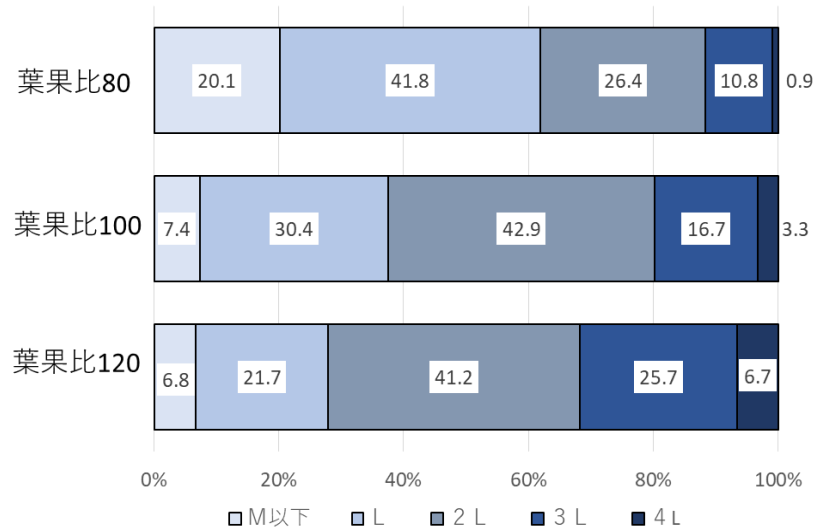


図1 露地栽培「熊本EC12」における葉果比の違いが果実階級別個数割合に及ぼす影響

注1) 果実階級はウンシュウミカンの出荷規格(果実の直径)に準じる

注2) 階級別の果実重はM以下 138g未満、L 139~184g、2L 185~230g、3L 231~300g

注3) 2019年~2021年の平均値

表1 露地栽培「熊本EC12」における葉果比の違いが収穫時の果実品質に及び収量に及ぼす影響

処理区	果実品質						収量 (kg/樹)	着果数 (果/m <sup>3</sup> )
	1果重 (g)	果肉歩合 (%)	横径 (cm)	果形指数	糖度 (Brix)	クエン酸濃度 (%)		
葉果比80	179	83.0	7.2	114	13.3	0.90	39.9	17.3
葉果比100	207	83.0	7.6	118	13.0	0.85	38.3	14.8
葉果比120	212	82.9	7.7	120	12.5	0.85	38.2	13.8

注1) 2019年~2021年の平均値

注2) 調査日は2019年12月18日、2020年12月11日、2021年12月9日

注3) 収量は樹冠容積13.2m<sup>3</sup>(樹幅3m×3m×高さ2.1m×0.7)として試算

表2 露地栽培「熊本EC12」における葉果比の違いが翌年の着花数等に及ぼす影響

処理区	着花数 (個)	有葉花率 (%)	着葉数 (枚)	新葉率 (%)	葉花比
葉果比80	504	12.4	571	42.4	1.8
葉果比100	450	11.8	482	38.0	1.5
葉果比120	501	14.1	503	44.1	1.4

注1) 2020年と2021年の平均値

注2) 枝先50cmまでの調査結果